

提 題 十一世紀の言葉論——アンセルムスの前期作品を中心にして

古 田 暁

ことばの誕生

アンセルムスは言葉について処女作『モノロギオン』¹⁾10章で始めて論じている。この作品は彼の思想の特徴を既に窺わせる点で非常に重要であり、言葉論においてもこの作品がその枠組みを提供している。神の本性とその内的生活を權威に頼らず²⁾ 一貫した議論で³⁾ 論じるという大胆な意図のもとに、被造物についての思索から始めて、相対的価値の存在にとって絶対的価値の存在が必要であることを指摘し、この本性による創造が、無からの創造でなければならないことを立証する。そこで無からの創造をどう理解するかについて8章で論じ、次章で被造物が創造以前 *quantum ad rationem facientis* 無でなかった⁴⁾ とし、なぜなら *in facientis ratione praecedat aliquod rei faciendae quasi exemplum, sive aptius dicitur forma, vel similitudo, aut regula*⁵⁾ だからである、と説明する。10章はこの *ratio facientis* と *exemplum, forma* などとの関係の解明をとりあげ、そこで彼の言葉論がはじめて展開される。

そういうわけで、この時点までに神はその姿を彼の思索の地平に現わしている。いまやその内的生活あるいは三一的内部構造に知的光を照射し、その姿を顕らかにする段階にある。言葉論がこの時点で論じられるということは、言葉が神的生活の内部要因をなし、それを解明する重要な鍵であるとアンセルムスが考えていたことを意味する。すなわち、彼にとり言葉論がこのうえもなく神学的課題であったといえる。

一方、彼は言葉という現象を *locutio* 語りの現場で捕らえ⁶⁾、三層構造の世界として描写する⁷⁾。すなわち、人は感覚的記号を使って外に向け語りかけ、時には同じ記号について内で眩きまた思いめぐらし、更に記号ではなく、その対象であるもの自体を心で凝視し、把握して内的言葉にまとめて表現するという。言葉は感覚的記号として外に向かい発せられ、内においてはそれが思考の対象となり、内的言葉はその対象自

体を把握するわけである。このように把握された内容をこめた言葉は、次の機会には記号として外に向け発せられ、言葉の円環の旅が一巡するのであろう。彼にとって言葉は環境のうちにある人間がその一部として環境を意識し、自覚し、それと連結し、自己を形成する要因であった。となると言葉は先ず環境を意識存在である人間が内にとり込む作業を担っているが、神学者として神について思索する場合、神は絶対者としてこの環境を超越しているから、人間の言葉がその場合でも有効かが問題となることが予想される。そして実際に15章、32章でそれが論じられる。

上記のように、10章の言葉論は、言葉が内的に事物を把握して、はじめて外に向かって発せられることを指摘する。外的言葉の前提として内的言葉がなければならない。一方この内的言葉はものそのものを把握したものであって、ものを指示する外的言葉との関連では「内的言葉さえあれば、他の言葉はものの確認には不必要でさえある」⁹⁾。しかもこの内的言葉は人為的に形成されたものでなく、自然に形づくられたもの(naturalia)で、この現象は普遍であるから、内的言語は万国共通ということになる⁹⁾。人はものに面する時自動的にそれを心のうちで映像化し、その「普遍の本質」を把握する¹⁰⁾。心身性の両側面を持つ、ものの直接的把握である。そこには人為的判断が入らないので¹¹⁾、間違いもなく、地域言語の制約もなく、万国共通の認識が得られることになる。

このようにみて来ると、三層構造として捕えられた言葉が実は二つの次元を形成していることがわかる：記号としての言葉と言葉としてのもの。すなわち、記号としての次元ともとしての次元である。ではなぜアンセルムスは言葉を三層構造としてまず論じるかという、後に明らかとなるように、記号としての言葉が日常世界と論理世界における使用に区分され、検討されるからであろう。しかし彼の言葉論が大別して記号と対象の二側面から論じられ、その作品のうちで二つの言葉論を形成していることに変わりはない。以後これらの言葉論について存在論的、対象中心の次元と意味論的、記号中心の次元に区別して説明する。

存在論的言葉論

アンセルムスが存在論的言葉論を検討、展開するのは主に『モノロギオン』においてである。それは上記のように神の三一的構造を論理的に一貫して究明することを意図する作品で、被造物の考察に始まり唯一の神の存在の必然性に到る点では伝統的で

あるが、さらに唯一の神の分析を通じ三位の神の顕現に到ろうとする点で全く独創的である。この処女作を師ランフランクスから批判されたとき¹²⁾、彼はそれがアウグスティヌスの『三位一体論』に倣ったものだと言ったが、両著は方法論上では根本的に異なる¹³⁾。アウグスティヌスは三位の信仰を神学的に解説した後で、人間精神の三一構造を検討し、それを神の三一構造の説明に供したのだが、アンセルムスの場合は被造物から唯一の神、唯一の神から三位一体の神へと一貫した論理の展開で説明しようというのである。神学的には当初からその挫折は予想される場所であった。方法論的にはスコトス・エリウジェナもその『自然の分割について』1巻456で唯一の神から三位の神へ一貫した展開を見せているが、それは信仰の神学的再表現でしかなく、論証を形成していない¹⁴⁾。

そしてこの『モノロギオン』におけるデ・ウノからデ・トゥリノへの移行に際して危険な橋渡しの役割を演じ、神の内的生活への門戸を外部から開ける鍵となるのが言葉論である。そこでアウグスティヌスのように三位の神の内的知と思惟との関連で言葉を論じる代わりに、先ず創造という神にのみ可能な、*ad extra* に働きかける行為における言葉の役割に光が照射される。そのためにこの段階ではもの *res* 中心に、それも創造さるべきもの中心に言葉が採り上げられることになる。*extra Deum* から *intra Deum* へと発展的にその軌跡を辿るには必要で又致し方ない道筋であったといえる。

そこで当然存在論的色彩が濃くなる。というのは、言葉はあるものの言葉として、常にそのものに類似している。しかし神の創造的行為においては、言葉とものの関係は被造物の場合とは逆になる¹⁵⁾。言葉がものに類似し、いわば従属するのではなく、創られたもののほうが創造的言葉に依拠し、それを規範とする。すなわち、後者はその存在の深みから被造物にその存在を付与し、被造物はその常なる支持なしでは一瞬たりとも存続できない¹⁶⁾。その点で被造物は創造者と比較して、殆ど存在しないときえ言えるのである。*omnia fere non esse et vix esse*¹⁷⁾。こうして一般的言葉の記号性がものに依拠するのに対し、創られたものの記号性は創造者にその根拠を見出すことになる。

記号とは関係の一種である。しかし被造物の記号性は絶対者による存在付与を前提としているから、存在論的角度から言葉を神学的に検討するとき、言葉はその対象との関連では *similitudo*, *imago*, *imitatio* でしかなく、それに対し言葉の対象は *existendi veritas* あるいは *essentia* と呼ばれる¹⁸⁾。言葉を中心に据えたこの神と被

造物との〈*veritas, essentia/similitudo, imitatio*〉の関係は、アンセルムスの全作品においてさらに被造物自体とそれらについての思惟、思惟とその言語表現にまで広げられて適用されている。特に『モノロギオン』とその延長ともいえる『真理について』に存在論的言葉観が濃厚に現われているといえよう。

『真理について』は『モノロギオン』18章の課題を広げて、神が真理であるなら、真理という度にそれが神であると言うべきかどうかを論じた作品であるが¹⁹⁾、彼の基本的考えは7章に述べられている。De *veritate essentiae rerum* という題が付いており、あるものが真に存在する *vere esse* といわれる場合の真理の意味を問うものである。『モノロギオン』9章で被造物は創造以前において神のうちで無ではなかったと述べられていることは指摘したが²⁰⁾、それは神のうちにそのものの *forma* があったからである。このことを前提として、アンセルムスは存在しているものはそれが神のうちにおいて在るものである限り、真に存在するとし²¹⁾、真理とはこの場合 *hoc sunt quod debent* だとした²²⁾。この *sunt* と *debent* との関係のうちに真理が存在し、それは精神のみのよく認識するところであるから、アンセルムスは真理を *rectitudo mente sola perceptibilis* と定義したのである²³⁾。そこでそれが『真理について』10章で敷衍されて次のようになる：*Ut cum veritas quae est in rerum existentia sit effectum summae veritatis, ipsa quoque causa est veritatis quae cogitationis est, et eius quae est in propositione: et istae duae veritates nullius sunt causa veritatis*²⁴⁾。ここに述べられている真理観は *essentia/similitudo* という存在論的言葉論を敷衍したものであることは明らかである。

意味論的言葉論

このように存在論的次元で言葉が〈*res-verbum*〉という枠内で論じられるのに対し、人間の言葉が記号として意味論的に論じられる場合には、ポエティウスから学んだと思われる〈*res-intellectus-vox*〉の三項の枠内で取り扱われる²⁵⁾。この *vox* は単なる音声でなく、*vox significativa, nomen, verbum* までを含み、それらを意味するものと解釈するのが妥当であろう²⁶⁾。感覚的記号と、その意味内容としての *intellectus* と、その対象である *res* の三項であることは、『モノロギオン』10章の言葉の発生論から知られる²⁷⁾。

『グラマティクスについて』は、アリストテレスとその注釈者ポエティウスなどの

論理学者たちが名詞由来語は「質のみを意味する」としたのに対し、プリスキアヌス、ドナートゥスら文法家の伝統が「名辞は実体と形容詞を意味する」としたのを背景として、*utrum sit substantia an qualitas* を論じた演習である²⁸⁾。17章でアンセルムスは更に言語論に関する二つの伝統の対立の存在を示し、彼が論理学者の側に立つことを示唆している²⁹⁾。言葉はものをのみ意味するから、その言葉が意味するものが何かを言う場合も、必然的にもものが何かを語ることになるというのである³⁰⁾。彼がここで言わんとしているのは、言葉は直接には言葉の意味内容を指し³¹⁾、間接にのみものを指す³²⁾ということである。これは言葉は直接ものを指し示すとした文法家の伝統を批判する論理学者の立場であって、アンセルムスの意味論的理解を明らかに示している。

このように言葉が直接にももの本性を示すよりも意味内容を示すものだとして、では言葉の意味自体はどう構成されているのかということ、厳密な意味と日常話上の意味とに分けられる³³⁾。すなわち、言葉は日常生活において必ずしもその厳密な意味で使われず、状況に応じて異なる使用方法がなされるという事情を前提として、言葉自体が言語世界で持つ意味 *significatio per se* に対して、この厳密な意味を媒介して日常話法でものを指名しあるいは動作によりものを直接指示する場合の意味 *significatio per aliud* に分ける。その上で、彼は前者のような意味がその言葉にとって不可欠 (*substantialis*) であるのに対し、後者の意味はその言葉にとって非本質的 (*accidentalis*) であることを指摘している³⁴⁾。

grammaticus というラテン語は「教養〈人〉」と「〈教養ある〉」を意味するが、*grammatica* なしでは *grammaticus* たりえないから³⁵⁾、*grammaticus* という言葉にとって *grammatica* は主要な意味だが *homo* は付随的で、不可欠ではない³⁶⁾。そこで前者の意味を *significativa*、後者の意味を *appellativa* と呼び、こうして意味は *significativa*, *substantialis*, *per se* なものと、*appellativa*, *accidentalis*, *per aliud* なものに分けられるのである。

以上からしてアンセルムスが意味を言葉自体を中心とするものと、対象を中心とするものに分けて解釈していたことが知られる。*de voce* と *de re* な解釈である。*quid sit grammaticus* という問いに対して、それが *de voce* の質問なら、*est vox significans qualitatem* と答え、*de re* な質問なら *est qualitas* と答えることになろう³⁷⁾。

さらに3—4章で、意味の世界においては *esse* は *intelligere* と同等のレベルにあり、言い換え可能であることを指摘する。*qui dicit: omnis homo potest intelligi*

homo sine grammatica,...; nonne hoc significat quia *esse* hominis non indiget grammatica...?」³⁸⁾ [この解釈の意味は重い。なぜなら、アンセルムスにとってあるものの *esse* を語ることはそのものの定義について語ることになるからである。esse grammatici non est esse hominis, id est non esse eandem definitionem utriusque³⁹⁾ という結論がこれを示している。

さらに意味と理解、significare と intelligere が de voce と de re との関連で繋がれていることを3章から窺える。an tibi videtur ‚animalis’ nomen aliquid aliud significare quam ‚substantiam animatam sensibilem’?...dic quoque, utrum omne quod non est aliud quam substantia animata sensibilis, possit intelligi praeter rationalitatem...⁴⁰⁾。言葉の意味も、significativa な厳密な意味の場合、対象のものの本性の理解と不可分なのである。

上記のことからアンセルムスの意味世界では res-intellectus-vox が実は res-〈intellectus/significatio〉-vox であることがわかる。そしてこの res は tam differentes res, scilicet creans et creata essentia⁴¹⁾ であるから、彼の言語に対する深く又広い関心と理解はその全作品にわたり、処女作から最後の作品にいたるまで言語分析をもって「かくも異なる」創造者と被造物の関係を解釈する努力が払われている。その良い例が『モノロギオン』15, 19, 79章などに見られる。

アンセルムスの神学的世界と言葉

アンセルムスの神学が展開する世界には創造者と被造物しか存在しない。この両者の de re な関係を創造を媒体として考える場合、creatura-creator/similitudo-essentia という存在論的言葉の世界が語られる。しかしその言葉自体が記号であることから、意味論的解釈が要求される。こうしてアンセルムスの神学はこの二つのしかし不可分な言葉論の次元で論じられることになる。『モノロギオン』のように存在論的言葉の次元のほうが圧倒的に強い場合があれば、また『グラマティクスについて』のように意味論が全体を占める場合もある。しかし両次元が同時に深く関わる場合があるのは当然である。『モノロギオン』では26, 65章、『プロスロギオン』2—4章などが好例である。後者で神が esse aliquid quo nihil maius cogitari possit⁴²⁾ と定義され、更に intelligit quod audit⁴³⁾ という時、上記の esse と intelligere の関係理解を前提として、vox の intellectus を語っているのである。しかしこのように理解された

aliquid が実在するかどうかについて *potest cogitari esse et in re, quod maius est*⁴⁴⁾ という時、この「そのほうが偉大である」は存在論的な言葉の次元で解釈されたものである。in ipsis sunt per ipsam suam *essentiam*; in nostra vero scientia ...sunt...earum *similitudines*. restat igitur ut tanto *verius* sint in seipsis quam in nostra scientia...⁴⁵⁾である。

アンセルムスの言葉論の二面性との関連で次のことを指摘しておかなくてはならない。一つにはアンセルムスの *ratio* 観である。彼の合理主義とも批判される人間知性にたいする絶大な信頼と、それと矛盾するかにみえる人間の知性に対する厳しい限界についての言及である。一方で、『モノロギオン』のように、唯一の神から三位の神へと一貫した「論証」を試みるとともに、「人は神について殆どなにも知る事ができない」ともいう⁴⁶⁾。あるいは『言の受肉に関する書簡』で何故そうかという理由を謙虚に「出来る限り」求めよ⁴⁷⁾といいながら、一方『神はなぜ人間となられたか』⁴⁸⁾ではキリストの受肉という歴史的事実を括弧にいれて、理性の分析からして神の受肉の必要性を説く⁴⁹⁾。このような矛盾と思える彼の *ratio* にたいする姿勢は、あるいは彼の特殊な言葉観から解釈が可能なのかもしれない。

次に彼の言葉観と認識論における「自然」的、自動的側面の強調である。『モノロギオン』10章におけるものの「普遍の本質」の自動的把握⁵⁰⁾、それに由来する第三の言葉の普遍性⁵¹⁾、『真理について』における知覚の不可謬性⁵²⁾、与えられた表意機能を真偽を問わず果たす「自然」性 *significat ... ad quod facta est*⁵³⁾などである。これらは全て言葉の存在論的側面の考察からきているといえよう。

最後にこのアンセルムスの言葉論の歴史的意義だが、当時の神学へのディアレクティカの導入に促されて、アリストテレスの論理学を彼なりに咀嚼、解釈し、教父神学以来のプラトンの色彩の濃い伝統に適用し、ポエティウスの *fidem si poteris ratione-mque coniunge*⁵⁴⁾ を実践したのと言えよう。結果として二種の言葉論が展開されたが、それにより彼の神学が単なる言葉と概念の操作という文法と弁証論理による解釈学に留まらず、ロゴス論を土台とした世界観と人間観を含む哲学的解釈の次元をも採りこんだのである⁵⁵⁾。

註

- 1) 本論のアンセルムス作品の引用は全て Franciscus Salesius Schmitt による S. ANSELMII CANTUARIENSIS ARCHIEPISCOPI OPERA OMNIA (Stuttgart Bad Cannstatt 1968) を使用する。本論はアンセルムスの言葉論の梗概であり、各論については後日を期したい。又、第二次資料のレファラン스는枚数の制約からほとんど省いた。
- 2) Prologus 7, 7-8: auctoritate scripturae penitus nihil in ea persuaderetur.
- 3) 「一貫した」とは後で触れるが、一なる神から三位の神へと議論が一貫して論じられ、前者が理性で論じられるが、後者は信仰を前提とするという区別がない。それは中世において神とは三位一体の神であったからであろう。P. Vignaux, *Philosophie au moyen age* (Castella, Albeuve, 1987) p. 107.
- 4) *Mon.* 8, 24, 19-20.
- 5) *Ibid.*, 13-14.
- 6) 10, 24, 29-30. “frequenti nam usu cognoscitur, quia rem unam tripliciter loqui possumus.”
- 7) 人間の靈魂の認識機能の区分—sensus, significatio, ratio—については, Boethius, *De Consolatione Philosophiae*, V, pr. 4 d. 5 参照。なお, *Mon.* 10, 25, 7 における「intuetur」の用法は検討に値する。感覚と知性の働きで、対象と直接接し、その本質を把握する“視覚的”行為なのである。cf. *Mon.* 33, 52, 14-15; *Pros.* 18, 114, 17.
- 8) *Mon.* 10, 25, 13-14. “ubi ista sunt, nullum aliud verbum est necessarium ad rem cognoscendam.”
- 9) *Ibid.*, 11-12. “sed illius quam tertiam et ultimam posui locutionis verba... naturalia sunt et apud omnes gentes sunt eadem.”
- 10) *Ibid.*, 8-9. “per rationem vero, ut cum eius universalem essentiam, quae est, ‘animal rationale mortale’, cogitat.”
- 11) Cf. *Ver.* 6, 183, 23. “ipsa namque ‘sensus interior se fallit, non illi mentitur exterior.” *De Veritate* では一貫して人間が下す判断の行為とその機能を区別し、後者の機能自体の真实性を強調している。
- 12) この書簡は残っていない。
- 13) *Mon.* Prologus 8, 8-14.
- 14) I. P. Sheldon-Williams, IOHANNIS SCOTTI ERIUGENAE PERIPHYSEON (DE DIVISIONE NATURAE) liber primus (Dublin, 1978) p. 68-70.
- 15) *Mon.* 31, 48, 17-28.
- 16) *Ibid.*, 13, 27, 13-16.
- 17) *Ibid.*, 28, 46, 2-3.

- 18) *Ibid.*, 31, 49, 3. あるいは *principalis essenita* (33, 53, 5-6), *prima essentia* (34, 53, 26) と呼ぶ。
- 19) *Ver.* 1, 176, 4-6.
- 20) 上註 4 参照。
- 21) *Ver.* 7, 185, 15. "quidquid igitur est, vere est, inquantum est hoc quod ibi est.
- 22) *Ibid.*, 27. "vere hoc sunt, quod debent."
- 23) *Ibid.*, 11, 191, 19-20. "possumus igitur, nisi fallor, definire quia veritas est rectitudo mente sola perceptibilis."
- 24) *Ibid.*, 10, 190, 9-12.
- 25) Boethius, IN LIBRUM ARISTOTELIS DE INTERPRETATIONE LIBRI DUO, PL. 64, 297 B: "tria sunt ex quibus omnis collocutio disputatioque perficitur, res, intellectus, voces."
- 26) *Mon.* per passim.
- 27) *Ibid.*, 10, 24. 31-25, 9.
- 28) *Gram.* 1, 145, 4-9.
- 29) *Ibid.*, 17, 162, 20.
- 30) *Ibid.* 25-26.
- 31) "significare": *ibid.*, 24-25. "voces non significant nisi res."
- 32) "ostendere": *ibid.*, 23-24.
- 33) *Ibid.*, 14, 159, 29; 12, 157, 3-6.
- 34) *Ibid.*, 17, 163, 2-16. tc.
- 35) *Ibid.*, 5, 149, 19-22.
- 36) *Ibid.*, 14, 159, 28-29.
- 37) *Ibid.*, 18, 163, 23-25. "si quaeris de voce, quia est vox significans qualitatem; si vero quaeris de re: quia est qualitas."
- 38) *Ibid.*, 4, 149, 19-22.
- 39) *Ibid.*, 5, 149, 27-28; 8, 152, 30. cf. D. P. Henry, *The De Grammatico of St. Anselm: The Theory of Paronymy* (University of Notre Dame, 1964) ap. 135.
- 40) *Ibid.*, 3, 147, 1-4.
- 41) *Mon.* 34, 53, 15.
- 42) *Pros.* 2, 101, 5.
- 43) *Ibid.*, 8.
- 44) *Ibid.*, 17.
- 45) *Mon.* 36, 54, 19-55, 3.
- 46) *Ibid.*, 64, 75, 14: "de qua aut nihil aut vix aliquid ab homine sciri possibile est"
- 47) E, I. V. 1, 7, 2.

- 48) C. D. H. I. 10, 67, 12-13.
 49) *Ibid.*, II. 1, 97, 4 sq.
 50) *Mon.* 10, 25, 9.
 51) *Ibid.*, 12.
 52) 上註11.
 53) *Ver.* 2, 179, 4
 54) Boethius, UTRUM PATER ET FILIUS ET SPIRITUS SANCTUS, PL. 64, 1302.
 55) M.-D. Chenu, *La théologie comme science au XIII^e siècle* (Vrin, Paris, 1957) p. 18 参照.
-

提 題 「唯名論」の成立と展開

岩 熊 幸 男

普遍論争は、11・12世紀にことばをめぐって生じた問題の中で最も重要なものの一つである。論争のなかでことばにより深く関わったのは、いわゆる「唯名論者」であった。彼らの教説はいかに成立しいかに発展したのか、本論ではこれを問いたい。普遍論争は、ポルフェリオスのイサゴギーをきっかけとして生じた。従って、この論争について論じるには、当時かかれたイサゴギー注釈を検討する必要がある。現在23部の注釈が知られている。そのうちで公刊されているのは、アベラールの手になるとされる4部のみである。残る15部の未刊注釈を検討すると、「唯名論」の成立と展開についての若干の新しい知見が得られると同時に、今後の研究を待つべき新たな問題点も浮び上がる。それらを以下に提示することで、提題としたい。

1

「実念論／唯名論 (realism/nominalism)」という近代哲学用語を生み出した‘*reales/nominales*’という語は、12世紀中葉以降になってはじめて資料上に登場する。また、